

*Christmas Special Story*

プリマリランと金色の星

プリマリランは元気なペンギンの女の子だ。お母さんがこの前の誕生日に編んでくれた、お気に入りの赤いニット帽がとてもよく似合っている。プリマリランという名前はちよつと長いので、みんなはプリマリランのことを、親しみを込めて「リラ」と呼んでいる。

リラの手や、おなかは、例えばおひさまが照らしてくれているのは確かだけれども、姿がよく見えないくらい雲が多い日の空のような色をしたふわふわで覆われている。瞳は夜空のように真っ黒で、いつもキラキラめいている。

リラたちはみんな、生まれたそのときから小さな星を持っている。赤ん坊が生まれるとその瞬間、星がぼこんと生まれるのだ。そしてその小さな星は死ぬまでずっとその子のそばにいる。その冬、暖炉に薪をくべた最初の日に生まれたリラの星は、銀世界の朝のように真っ白に輝いている。

春がくれば誰かの桃色の星たちが、夏がくれば青い星たちが、秋がくれば赤い星たちが、それぞれ待っていたとばかりに光をまして放ちだす。リラの星は北風がご挨拶に来ると、途端に元気いっぱいになる星なのだ。

今年の桃色の星の季節、リラは新しい友達に出会った。

気まぐれな春風はそこかしこに吹いては、りんごや桜の花びらを宙に舞い上がらせて、とても楽しそうに遊んでいた。風が含んだにおいをお腹いっぱい吸い込んで、リラは「空気をおやつにするごっこ」をしながらのんびり過ごしていた。白いもやがあちこちに立ちこめていて、景色を少しづつ隠してみせていた。そのもやの向こう側から桃色の星がキラ、キラと小さな光を信号のように送り合っていた。ああ、な

んて幸せな時間だろう。

「リラ、お母さん、おでかけしてくるから、ちょっとお留守番しててね」

台所の窓からお母さんがリラに声をかけた。

「どこに行くの？」

「今日はおとなりで新しいご一家がお引越してきたのよ。だからお母さん、ご挨拶に木いちごのパイを持っていこうと思うの。きつとお引越してきたばかりで、当分お菓子を作るお暇なんてないと思えますからね」

「わかったわ。ねえ、お母さん、あたしの分のパイもある？」

「もちろんよ。リラの好物ですものね。帰ったらお茶にしましょう」

「やったあ。いってらっしゃい」

空では相変わらず風が楽しそうに遊んでいた。リラは空気をおやつにするのをやめた。おなががいっぱいになってしまつて、木いちごのパイが食べられなくなつてしまうと困るから。

そのとき、星々の間に立ちこめていた白いもやを、風が花びらと一緒にふうふうと吹き飛ばした。

リラの目に、本でしか見たことのない遠い世界の海のような色をした、深くて青い星の光が飛び込んできた。そして、その星のそばでは、濃い、つやつやとした茶色の毛並みをして、白い襟のついた緑のチョッキと格好のいい黒くて短いブーツを身につけた、しましま猫の男の子がひとりで土いじりをして遊んでいた。

「こんにちは！」

リラは元気よくご挨拶をした。

「こんにちは」

猫の男の子も、顔をあげてご挨拶をした。

「あなた、今日お引越してきた、お隣のひと？」

リラは尋ねた。

「うん。そうだよ」

「まあ、やっぱり。今、うちのお母さんがあなたのおうちに木いちごのパイを届けに行つたところよ」

「木いちごのパイだつて？ ぼく、大好きだよ。嬉しいなあ」

「あたしも大好きなの。お母さんが帰ってきたら一緒にお茶にするのよ」

リラは、男の子も木いちごのパイが好きだと聞いて、なんだか嬉しくなった。

「あたしはプリマリラン。でもみんなはあたしのことをリラと呼ぶの」

「ぼくはエキユイロ。キュロ、でいいよ」

そう言つて、キュロはにこつと笑つた。

リラとキュロは出会つてすぐに仲良くなつた、わけではない。

キュロは、よく一人で土いじりをしたり、青い星に腰かけてぼんやり空を眺めたりしていた。

リラはキュロと仲良しになりたかつた。キュロがにこつと笑つたその顔が、リラはとても大好きになつたのだつた。だから、もう一度キュロの「にこつ」に会いたいな、とリラは思った。

つづきは本誌で……！

